

歌舞伎自称詞の歴史社会言語学的研究—過去から現在を見る試み— First Persons in Kabuki Texts—Explaining the Present from the Past—

れいのるず秋葉かつえ

要 旨

一人称詞は、日本語人がかかえたどうしようもない問題である。どうして日本語にはこうも数多い自称詞があるのか。どうして主要な男性自称詞が漢語由来の「僕」なのか。過去においてあきれるほど多くの自称詞が大陸言語から借用された。欧米の言語学では、人称代名詞はもっとも安定した言語カテゴリーで、めったに他言語から借用されないものだ、と理解されている。では、日本語はなぜ常に不安定なままに続いてきたのか。説明されねばならない。この研究は、歌舞伎脚本の自称詞を歴史社会言語学的に分析し、次のような仮説をたてる。(i) 原日本語は、一・二人称を区別しない「前人称」言語であった。(ii) 「私」のような疑いもなく一人称詞であるものは大陸言語との接触以降イノヴェートされた。(iii) 江戸前期、大量の漢語自称詞・対称詞が借用された。(iv) 近代化のなかで多くの漢語自称詞が衰退したが、一人称詞は今も複数であり、不安定である。

キーワード：前人称、内的再構築、クレオール、文法化、ドリフト

1. はじめに

いかなる言語であれ、ひとはだれも、言語がいつ生まれたのか、その誕生日を知ることはできない。それぞれの言語は、地平なき過去からばうっと浮き出てくる。
(ベネディクト・アンダーソン⁽¹⁾)

日本語は、いくつかの領域で他言語に見られない独特の姿を見せる。たとえば、人称法である。第一に、日本語の人称代名詞（以下、人称詞）とヨーロッパ言語学で伝統的に論じられてきた人称詞とでは、その内容が極めて異なる。英語では人称詞が高度な文法機能をもち、文法に深く組み込まれてい

るのにたいして、日本語では、一人称代名詞（以下、「一人称詞」「自称詞」とする）、二人称代名詞（以下、「二人称詞」「対称詞」とする）、三人称代名詞（以下、「三人称詞」とする）に相当するフォームがそれぞれに複数ずつあり、実際の使用に際しては、階級・年齢・ジェンダーなどを考慮して意味的に適切な選択をしなければならない。したがって、それらを「人称代名詞」という品詞としてとらえることが適切でないという文法家もある⁽²⁾。第二に、歴史的に遡って見ると、日本語人称領域はほとんど常に不安定で、しかも、大陸言語の人称詞を大量に借り入れている。『日本類語大辞典』では、「わたし」の類語を100以上掲げているが、その大半が漢語である。一人称詞や二人称詞を複数発達させた言語は、日本語の他にないわけではないが、日本語ほど常に人称ことばが変化し、選択肢の数が多い言語はないだろう。「この国の言葉をなにより際だたせてきたのは、どんな言葉でもなく、みずからを語るべき一人称の揺らぎである」と詩人が嘆くのも頷ける⁽³⁾。

欧米言語学では、人称詞はもっとも安定した文法カテゴリーで人称詞が歴史的に変化することはほとんどないとされる⁽⁴⁾。したがって、人称詞の他言語からの借用も、よほどの言語的社会的状況がないかぎり起らないものだと考えられてきている⁽⁵⁾。そうした観点から見れば、日本語は極めて特殊な言語である。この研究では、歴史社会言語学的な構えで、日本語一人称詞の歴史を文字以前一地平なき過去一まで遡って、現代日本語の一人称詞の揺れが何に由来するのかわずかながら明らかにしてみたい。

古事記、日本書紀以前の日本列島にどんな言語が行われていたかは、諸説があつて明らかでない。わたしは、日本列島にはいくつもの系統の異なるクレオール言語が相互に影響しあいながら、半ば独立的に併存していたという視点にたつ⁽⁶⁾。そして、文字をもたない土着のクレオール言語群が大陸の表意文字言語に出会った時、世界の言語史上もっともユニークな言語混合のドラマが始まった、と考える。列島人は、漢字をもとに自らの書記方式（仮名）を作りだし、大陸言語の語彙を大量に取り入れつつ、新たな自称詞を創出してきた、と。少数の政治的文化的エリートだけがアクセスできる漢文が威信言語（＝高変種）として一方にあり、書かれた日本語とは無縁のままの大多

数の列島人たち—サヴァルタンたち—の、地域によって異なるネイティブことば（＝低変種）がもう一方にある。その中間にいろいろな話しことば・書きことばのサブ変種が発達し、全体としてダイグロッシック/ポリグロッシック（多変種併存）な言語状況が続いてきた、と。

江戸時代に書かれた歌舞伎脚本の自称詞を内的再構築（後述）の考え方にそって掘り起こしていくと、日本列島土着の言語（「原日本語」と呼ぶことにする）は一・二人称の区別を明確にもたない「前人称言語」⁽⁷⁾であった可能性が「ほうーっと浮き出て」見えてくる。ならば、その前人称言語が大陸言語の刺激によって一人称二人称を形態的に区別する「人称言語」に向かったのであり、その先に現代日本語があると考えるのは妥当であろう。人称詞の変化の歴史も、たぶん階級のない無文字社会であった列島に大陸の発達した文字言語が齎された時から始まったのだ。

現代日本語は、一応、一・二・三人称を区別する人称言語となっている。自称詞が対称詞として使われることはもはやない。しかし、一人称詞が複数あり、二人称詞は一人称詞以上に使いにくい。三人称詞の「彼」「彼女」は明治期欧米の文学翻訳語として工夫されたもの、それまでの日本語は「三人称を知らなかった」（野口1994：191）のである。今でも「彼」「彼女」を三人称として使う層は限られている。日本語は、人称言語としてまだ成熟していないのである。

2. 歴史社会言語学

言語の通時面を切り捨てた生成変形文法理論がピークに達しようとしていた60年代終りに歴史社会言語学の提案を掲げたのが Weinreich, Labov, and Herzog (1968) であった。そこからラボフの社会言語学が育った。現実の言語使用に近い形で録音収集した大量のデータを量的質的に処理することによって今言語がどんな変化の流れのなかにあるのか、今起っている言語変化の背景にどんな社会変化があるのか、言語変化と社会変化の関連性を「科学的に」読みとろうとする方法であった。ラボフの社会言語学は、言語変化の理論化をめざすものであると考える点で歴史的であるが、科学性を重視する

あまり、録音分析可能な音声言語だけを妥当なデータと認め、過去に書き残された文書を bad data として避けてしまった⁽⁸⁾。「現在から過去をみる方法」だとラボフはいうが、何百年、何千年の昔に起った変化は現在からは見えてこない。ヨーロッパの社会言語学研究者たちは、アメリカ社会言語学のこの限界に批判の眼を向けたのだった。過去に書き残された文書のコーパス化が進行し、過去に書かれた言語データに容易にアクセスできるようになったことによって、量的な分析も可能になってきている。過去の時代における言語変化の実体を把握し、言語変化の背景にある社会変化に言語の側から光をあてていくこと、それはヨーロッパ伝統の歴史言語学がめざしたことでもあった。歴史的で同時に社会学的である言語学に関心を抱く研究者たちのネットワーク (HiSoN=Historical Sociolinguistics Network) は、ゆるやかに広がっていった。2015年には *Journal of Historical Sociolinguistics* が発刊され、歴史社会言語学の存在が公になった。創刊号のトップ論文は Auer, Peersman, Pickl, Rutten and Vosters (2015) による Historical sociolinguistics: the field and its future (歴史社会言語学：研究分野とその未来) である。この研究運動のこれまでを振り返り、これからこの分野が向かうべき方向を示したものである。歴史社会言語学の展開は日本でも紹介されている⁽⁹⁾。

3. 江戸歌舞伎脚本の自称詞

過去に書かれた文書もその目的によって極めてフォーマルなものから、私的書簡・日記・旅行記・メモ等のような個人的な文書まで、様々である。どのような文書がいいかは、研究テーマによって異なる。この研究では、データとして歌舞伎脚本を使った。

江戸時代の庶民演劇として栄えた歌舞伎の脚本は、日本語の話しことばのサンプルを大量に提供してくれる。わたしが人称詞の分析を始めた当初、ハワイ大学の図書館でも歌舞伎全集が何種類か入手できた。歌舞伎の台詞は、もちろん、実際のことば遣いそのものではない。しかし、録音データの入手が不可能な時代の言語から、当時の話し手たちがどんな人間関係のなかでどんな言語生活をしたのかを知るのに、これ以上のデータはない。様々な社会

階層の、さまざまなキャラクターが、ステレオタイプ化されている。自称詞は重要なステレオタイプ化装置であった。役者が「拙者」とか「某」とか「身共」を自称しさえすればサムライ役を、「わちき」と自称すれば廓の花・おいらん芸者を演じることができた。歌舞伎脚本の作家たちは、敏感な言語観察者であり、ことばによるステレオタイプ作りの天才たちであった。

まず、表1を見てもらいたい。恣意的に選んだ15本の江戸歌舞伎脚本⁽¹⁰⁾からすべての自称詞を取り出し、内的再構築のために整理したものである。江戸時代の話しことばにおける自称詞がいかに様々であったかある程度感じとれると思う。

表1 歌舞伎脚本の自称詞

	具体的な形	例数
漢語 自称詞	余 (6)、拙者 (86)、拙者事 (1)、拙者め (9)、拙僧 (13)、 下郎 (13)、下郎め (8)、下拙 (4)、愚僧 (13)、愚老 (5)	148
和語 自称詞	[A] 某 ^{それがし} (59)、某事 (1)、某共 (1)、身 (38)、身共 (140)、 この身 (27)、わが身 (2) [B] わらは (3)、みずから (6)、わちき (4)、 わちきたち (1) [C] 私 ^{わたくし} し/わたくし (138)、私 ^{わたくし} しめ (1)、私 ^{わたくし} しども (10)、 わたし (425)、わたしめ (1)、わし (269)、 わしゃ (20)、わっち (2)、わっちゃん (1)、 わっちら (4)、わしら (15)、わいら (1) [D] 手前 (23)、こちら (2)、こっち (12)、こちゃ (1) [E] われ (38)、われわれ (40)、われわれども (3)、 われら (23)、わが (57)、おれ (265)、おりゃ (22)、 おれさま (2)、おいら (28)、おいらたち (2)、 おら (24)、おらっち (1)、おのれ (1)	1,794
合計		1,942

内的再構築のための手続きとして、まず漢語系と和語系に分けた。さらに、和語系自称詞を [A] [B] [C] [D] [E] に分類した。主としてサムライが使う和語自称詞が [A]、女性自称詞が [B]、「わたくし」「わたし」のヴァリエーションと考えられる自称詞群が [C]、場所方角ことばを転用した自称詞が [D]、その他が [E] である。実際に採集されたサンプル数 (= トークン) を括弧の中の数字で示した。引用に際しては、漢字・ひらがなの使い分けは原文どおりにし、ルビは必要な場合以外ははずした。

全部で55種類 (= タイプ) の自称詞が使われている。地域的には、江戸大阪などの都市庶民を対象に書かれた芝居であるから、他の地域の方言は使われていないだろう。書きことばでしか使われなかった自称詞は、おそらく含まれていない。

4. 自称詞の考古学—内的再構築⁽¹¹⁾

こうして集めた自称詞の集積をもとに^{internal reconstruction}内的再構築といわれる歴史言語学の作業を進める。それによって、江戸歌舞伎が書かれた時代の自称詞が過去のどういう変遷の結果としてあり、そこから明治維新に向けてさらにどう変化していくことになったか、自称詞の歴史の流れの方向が視えてくるはずだ。新しい層を上から取り除いていくと、過去の自称詞体系の^{residue}残存と思われる言語片が現れてくる。取り出されたカケラを繋ぎあわせ、言語変化の原理に依拠して喪われた部分を創造的・想像的に補っていく。それによって埋没していた過去の言語を復元すれば、過去の言語活動の実相がわかってくるはずだ、と内的再構築は考える。しかし、言語変化の原理についての理論的研究は、十分になされてきたとはいえず、日本語自称詞の再構築に機械的に適用できる内的再構築の原理が用意されてあるわけではない。わたし個人の日本語経験、日本語史の先学たちが示してくれた用例に、欧米言語の観察をもとに提案されてきた言語変化のメカニズムを試行錯誤的にあてはめ、つじつまを合わせ、仮説を構築する手作業である。個々の自称詞が現れた時期の認定に関しては、主に辻村 (1968: 390-400) の「敬語変遷一覧表」(以下「一覧表」という) を参照し、わたしがこれまで扱ってきた『新選書翰集』(三

浦編1915) という小さな書簡集、その他から得た人称詞に関する事実を念頭においた。はじめよう。

古層に被さっている層を新しいほうから順に取り除いていく。第7章で、詳しく述べるが、サムライことばの典型である「拙者」「愚老」のような漢語自称詞は、中世終りごろから近世にかけて借用されたものである。歌舞伎が書かれた歴史の時点では、明らかに一番新しい言語層の自称詞である。これをまず取り除く。

次に、和語 [A] を点検しよう。「某」^{それがし}「身共」^{みども} は中世「武家詞」として発達したもので、和語自称詞としては一番新しい層に属する。「身」は、土着日本語にあった「み」(「む」と発音されたともいう) という語に意味的に近似している漢字【身】が当てられたものであろう⁽¹²⁾ (以下、読みではなく文字を問題にしている場合は、【】を使って示す)。<こころ>に対する<身体>^{からだ}を意味する名詞であったが、中世になって人称詞として転用されるようになったという。「身」それ自体でも使われるが、「わが身」「この身」「その身」「おん身」のような形で使われることが多い。ちなみに、「身共」^{みども} は「身」に複数接尾辞「-ども」が接続してサムライ自称詞になったようだ⁽¹³⁾。

[B] はどうか。女性語である。「みずから」は平安時代、「わらは」は中世前期から、「わちき」は近世に現れたとされている。

[C] を観察しよう。「わたくし」の語源は明らかだとは言えないが、<「公」に対する個人>^{わたくし}という意味の漢語自称詞【私】がまず借用され、意味的に対応する和語自称詞としてつくり出された、と考えておく。第一音節の「わ-」は後に述べる人称詞の「わ」と同族である可能性があるが、それに続く「た」「く」「し」がどこから来たのかわからない。「一覧表」では「中世後期」の自称詞とし、出典として『太平記』をあげている。

[D] の「手前」「こちら」などは、話し手の観点から見た場所・方角を示すことばが自称詞として転用されたものであろう。「一覧表」では、「手前」は中世後期、「こちら」は近世に現れたとされている。

残りの自称詞 [E] が面白い。最古層に残ったのは「われ」「おれ」「おのれ」とそのヴァリエーションだけである。

「われ」は、万葉集の歌にも「和例」「倭例」「和礼」などと書かれて使われていて、和語系自称詞のなかではもっとも古くから発達した自称詞の一つだと考えられている。次章で述べるように、中世近世を生き延びて、近代になっても、文語的一人称詞として使われ、方言語では、二人称詞としての特殊性を保持して生き残っている。

歌舞伎脚本では例がなかった「わ」について触れておきたい。「わ」は自称詞のなかでももっとも古い時代、原日本語時代のものではないと思う。今でも津軽地方のお年寄りたちのあいだで、あるいは、若者たちの親しい会話で、自称詞として使われているという⁽¹⁴⁾。「あ」も古代語の一人称詞であったといわれるが、インフォーマルな場面で[wa]の[w]を脱落するのはよく見られる現象で、現代語でも「わたし」が「あたし」になったり「わたくし」が「あたくし」になったりしている。「わし」が「あし」になり、「わちき」が「あちき」になることもある。「あ」は「わ」のヴァリエーションであったのだろう。

「おれ」「おのれ」も、上代の文献に現れている発生の古い人称詞である(辻村1968)。「おれ」は、現代標準日本語では一般に男性自称詞のような観を与えているが、周的には性別に関係なく使われてきた。水俣病の女性が「おれは嫁にもいかなかっただ！」と抗議し、成田飛行場建設反対の抗議集会で女性が「おれ」を使っている場面をテレビ・ニュースで見た記憶がある。和語自称詞のさらに興味深い問題に進もう。

5. 「^{われ}我」と「^{われ}汝」—自称詞・対称詞の区別は江戸時代でも曖昧だった

原日本語の「われ」がどんな自称詞であったかを推測するにあたって興味深いのは、江戸歌舞伎脚本では「われ」が自称詞として使われている例よりも対称詞として使われている例の方が多いことである。

たとえば、『東海道四谷怪談』というポピュラーな芝居がある。町人階級の生活を生き生きと写實的に描き出した生世話物^{きせわ}が得意であったという四代目鶴屋南北^{つるやなんぼく}(1755-1829)の代表作である。「われ」が26例あるが、自称詞として使われているのは2例しかない。24例(「わりゃ」も含む)が対称詞と

して使われている。例を見てみよう。なお、以下で例文の引用にあたっては、人称詞以外のルビは省き、漢字は新字体に改めた。

例1：序幕で非人×△○が物乞いをしていたらしい浪人の四谷左門^{よつやさもん}
(主役「お岩」の父親)に絡んでいる場面である。

非×：コレ、わりやアどこの奴か知らねえが、おいらが仲間にも
渡り引きのあるものだワ。

非△：われも只のぐれぢゃアあるめえ。いい年をしやアがって、馬
鹿な野郎ぢゃねえか。(p. 21)

非人○が、つづいて「われが貰い溜めを、ここへ出せ」とカツアゲにかかっている。「わりやア」も「われ」も自称詞としてではなく、虐めにあっている四谷左門を指すことば、つまり、you として使われているのである。

自称詞「われ」の2例は、大詰めに近づいた段階で使われている。赤穂事件で浪人になった忠義のサムライという設定の小汐田又之丞の独白的な長台詞である。他の芝居でも、歌舞伎用語でいう「謡がかり」(能の謡に似せた歌うようなパートで歌舞伎脚本では「へ」で示されている)で使われていることが多い。二人称の「われ」は、例1のように、「非人」など下層社会の人間の台詞によく出てくる。音韻的にも、転訛して「わりや」となる傾向がある。一人称と二人称を明確に区別しなかった原日本語の「われ」は、江戸時代か、それ以前に高文化的な「われ」と低文化的な「われ・わりや」に分離しつつあったと考えていい。

わたしの生まれた地域(千葉県上総)では、自称詞としても対称詞としても「われ」が実際に使われるのを聞いたことがなかった。「われ」が自称詞であることは、「われは海の子」のような童謡や唱歌で習いおぼえた。二人称詞の「われ」を経験したのは、小学校に入ったばかりの頃であっただろうか。千葉県佐原の親戚に泊まりに行った時だった。近所のお寺の境内で悪ガキたちの取っ組み合いの喧嘩が始まっていた。手ぬぐい被りでそこに現れた女性が悪ガキの一人に向かって「われはなー」とどなり付けたのにわたし

は眼をみはった。その口調の激しさと「われ」が対称表現として使われたことに驚いたのである。対称詞「われ」に実際に出会ったのは、この時限りであった。「われ」が現代に近い時点でも二人称詞として使われていることを示す実例として提示しておきたい。二人称詞の「われ」は、西日本の方言では今でも男性たちによってかなり頻繁に用いられているという報告もあり、河内弁の特徴だとも記されている⁽¹⁵⁾。

「われ」だけではない。辻村（1968：91-107）によれば、「おれ」も対称詞として使われた時代があった。古代から中世のある時点まで「おれ」が対称詞として使われている例が相当数あること、『大言海』に自称詞「おれ」と対称詞「おれ」の項目が掲げられていることを指摘している。山田孝雄の『日本文学概論』に<「オレ」は自己、相手、他者のいずれをも指示しうるものであった>とあることから、「ひいてはまた、自称、対称、他称（＝三人称）、いずれの代名詞にも転用され得るものと考えられる」と辻村は述べている。しかし、「ただし、他称の例と見なされるものは実際にはない」と付け加えているから、他称にも使われたというのはとりえあえずカッコに入れておくことにして、「おれ」が自分と相手をはっきり区別せずに使われた時代があったということでは先学たちの見解は一致していると考えていい。

歌舞伎データには、「おれ」が265例あるがすべて紛れもなく自称詞として使われている。「おれ」のヴァリエーション「おりゃ」「おいら」「おら」「おらっち」なども対称詞として使われた例はない。「われ」が江戸時代も、その後も、両義的であったのに対して、「おれ」は、江戸時代までにはすでに自称詞として文法化^{grammatitalize}されていたと言える⁽¹⁶⁾。

歌舞伎作家たちは、「われ」「おのれ」「てまえ」などが一人称詞としても二人称詞としても使われること、したがって、意味が曖昧になる場合もあることを意識していたのだろう。歌舞伎データでこれらの和語人称詞が二人称詞として使われている場合、しばしば漢字【汝】が充てられ、それに訓読みルビが振られている。『東海道四谷怪談』では、「汝」（2例）、「汝」（1例）、「汝」（1例）、「汝」（6例）、「汝」（2例）が観察された。

ユーラシア大陸の東のはて、そこから先へゆくこともかなわない、そこへ

入ってくることも容易でない辺境。そこには、大陸に発達する文化の波及も届かなかった。「狩猟・採集の経済から脱却していない」、無政府・無階級の原始的な文化は、水田耕作や金属文化がもたらされた弥生文化の時代（紀元前2世紀頃）まで数千年にわたって続いた、と家永（1982：9-16）はいう。そこで人は何を思い、他者とどんな関係を結び、何を語り合ったのだろうか。人と人が個として対立的に存在するのではなく、自然を介してゆるやかに結ばれ、あるいは、重なりあい群がって生活する小規模な村共同体、^{community}「我」と^{われ}「汝」が構成する複数一人称的な「われ-われ」の世界であった……。未開社会の言語は、意味も音形も、文明が進化した社会の言語感覚で考えるよりはずっと曖昧なものであっただろう⁽¹⁷⁾。一人称、二人称をとくに区別しなかったということは、かならずしも原始日本が抗争のない「和」の社会であったという意味ではなく、「社会を形成していく人間的自覚の低さ」（家永1982：13）の顕われであったのかもしれない。

6. 自称詞の^{innovation}創出一人称的言語に向かって

原日本語は一人称と二人称を区別しない前人称的な言語であったと仮定して、さらに推論をすすめよう。現代日本語の人称法では、性差、階級差などの問題はあるにしても、基本的には、一・二人称をはっきり区別している。男の子に向かって「ボクいくつ？」のような言い方をすることがあるが、これは幼い子供相手の言語使用域に限って起る周辺的な現象である。また、関西方面では「自分」が二人称詞として使われるという事実があるが、これは、上で述べた河内弁における二人称詞の「われ」と同じで、一部の地域に見られる方言要素である。

無文字のクレオール的未開言語であった原日本語は、現代日本語にいたる歴史のどこかで一人称、二人称、三人称を形態上区別する「人称言語」にシフトしてきたと考えざるをえない。話し手たちの意識の奥深くに根ざした大掛かりで長期にわたる言語変化の流れである。英語の大母音推移は、母音体系が崩れはじめて再び安定するまでに3-4世紀（1350年ごろから1700年ごろまで）かかったとされているが、日本語の人称シフトは、1500年、1600年

かかって、今なお継続している。それはどのようにして始まったのだろうか。
表1の自称詞群 [D] の「手前」にヒントがある。

歌舞伎脚本では、「手前」が自称詞としても対称詞としても使われている。
再び『東海道四谷怪談』をみてみよう。自称詞の「手前」が6例、対称詞の
「手前/てめえ」が22例ある。

例2：(例1で見た場面の続き。非人にかからまれていた四谷左門を娘婿
の民谷伊右衛門が多少の金子を支払って助けた。左門は伊右衛門
がかつて藩の御用金を盗んだことを知っており、伊右衛門とお岩
を離縁させようとしている。借りを作るわけに行かぬと言い張
る。それに対する伊右衛門のセリフである。)

伊右：(ムツとして) 黙らっしゃい左門どの。・・・して又、何ぞ
てまへ
手前が盗んだと申す、証拠でもござるか。 (p. 25)

妻のお岩を毒殺しようとするほど追いつめられている伊右衛門であるが、
忠義のサムライ浪人である義父の四谷左門との口論では、全体にサムライら
しい威信ことばを使っている。「手前」は、サムライことばではないが、「お
れ」「おいら」に比べると、礼法的な謙讓感がある。ポライトネス理論で言
うネガティブ・ポライトネスであろうか。

例3：(伊右衛門が今は伊右衛門の折助(下男)になった長兵衛に向
かっていう台詞。)

伊右：この鷹を据えて、その犬を曳いててまへ
汝ばかり先に帰りをれ、
——。たはけ面め。 (p. 209)

例4：(お岩の妹おそでと、仮の夫婦になった直助権兵衛の会話。支払
いが不足している、金がある、と言うおそでに直助は気前よさそ

うに拾った櫛を出して、これを売れと言う。おそでは驚く。殺された姉がいつもさしていた鼈甲櫛であったからである。）

そで：モシ、この櫛は、どこで拾はしゃんしたえ。

直助：・・・・・・。てめえ見覚えでもあるやうか。 (p. 138)

例3は、立派なサムライの形なりをした伊右衛門が偉そうに長兵衛を見下して言う台詞である。「手前てまへ」でも「てめえ」でもなく「汝てまへ」が宛てられているのが興味深い。「手前てまへ」と「てめえ」の間には、微妙に待遇価の異なるいくつものヴァリエーションがあったのだろう。歌舞伎作家は役者にその微妙な違いを声で表現することを期待したのだろうか。例4では、そでと直助のやり取りがしばらく続き、直助がそでに向けていう二人称詞としての「てめえ」が8回出てくる。そでは直助へ「お前」を使っているから対等ではないが、直助がそでを卑しめて「てめえ」と言っているようではない。直助はもと民谷家の下郎であった。そでに惚れていて早くそでと本当の夫婦になりたいと願っている男からの親おんしみだことばこばばであったのではないか。

最古層Eの「われ」も、D層の「手前てまへ」も、一人称・二人称両用に使われたという意味で、前人称的である。見逃してならないのは、「手前」の意味と待遇的な意味との親和性である。複数形の「手前ども」は明らかに謙譲の自称表現であるし、「お手前」「お手前方」「お手前様」などは敬語的二人称詞である。「手前」は待遇意識の発生をともなって新たに創出された前人称なのではないか。待遇意識は、自分と相手との心理的な距離に関わる意識であり、一人称詞と二人称詞を区別する意識につながる。「手前」が頻繁に使われるようになった頃、一人称詞が創出され、ほぼ同時か少し遅れて二人称詞ができ上がったと考えられる。

曖昧でない一人称詞の出現を決定的なものにしたのは[C]層の「わたくし」であろう。【公】(‘public’)に対する個人(‘personal/private’)という意味をもつ【私】が地位の高い相手にも申す時に謙譲の意味をこめて使われたと考えられる。その訓として「わたくし」が創出されたのではないか。ある

いは、和語謙讓語としてすでに存在していた「わたくし」が漢語の【私】と組み合わせられたのかもしれない。一覧表では、中世後期からの一人称詞としてあげられている。語源の【私】がもっていた緊肅感を継承している「わたくし」は、なれなれしく対象に向かって揺曳していくことを許さない。相手との距離を保ち、みずからのアイデンティティをわきまえている自己。それは、人称世界の原点、ゆるぎない一人称詞である。

表1を振り返ってみよう。「わたし」が425例、「わし」が269例、頻度数がどの自称詞よりも高い。「お前」「おめえ」「お前様」が両義的ではない二人称詞として頻繁に使われ、＜遠くの方＞＜遠くにいる人＞をさすことばであった「あなた」も待遇価の高い二人称詞として使われ始めている。

中世後半、日本語は前人称的言語から人称的言語へ確実にシフトしはじめたと考えてよい。「わたくし」と前後してさまざまな文化階級の和語自称詞が次々に現れる。

[B]の「わらは」は、原義は＜童＞、中世後期の武家の女性自称詞として転用され、「わちき」は近世の「遊女ことば」とされている。どちらも自他のあいだで揺らがない自称詞であった。[A]の「某」「身共」も、中世の自称詞である。「一覧表」では、「それがし」が中世前期、「みども」が中世後期自称詞の例としてあげられている。「みども」は武家詞と注がついているが「それがし」には特に注記はない。わたしの扱った『新選書翰集』も中世の自称詞の例が少なく、伊達政宗がローマ法王に送ったとされる特殊な書簡に「某」が2例観察されるだけである。両義的でない自称詞は、当初は上位文化言語であったらしいことが窺える。

中世は文化的に停滞した暗黒の時代であった。貴族に代わって支配権力を手にした武士たちは、武力による覇権を保持することに腐心し、教育および文化という精神生活に関する面で独自の貢献をすることができなかった。少数の支配者を除けば、文字学習のゆとりはなく、中下層の武士たちが高位言語の漢文を修得するようになったのも戦国時代の終りであったという。＜戦国時代までの武士は、「切りとり強盗は武士の習い」ということばのとおり、文化や道徳とは縁遠い野蛮人であった＞などと言われたりする⁽¹⁸⁾。

7. 近世—漢語自称詞の大量輸入

そして、1600年。関ヶ原の戦いがあり、徳川の時代がやってくる。江戸時代前期は、全国統一が成り、いわゆる「士農工商」の身分制度を基盤にした中央集権的な封建社会が整備されていった時代であった⁽¹⁹⁾。家康は、中世的な下克上の連鎖を打ちきる政策として大義名分を重んじる儒教である朱子学を国学とし、武士たちに学ばせた。日本最初の金属活字を造らせ、それを使って政治に関する漢籍を大量に出版させもした。その結果「史上空前の、漢籍出版ブームが起き」「漢文の黄金時代」が出現した。徳川家康の前と後では、日本史の流れが、すっかり変わってしまった、と加藤（2006）は指摘する。「武」よりも「文」が力をもつ社会、「字が出来なければ」出世できない、「勝ち組」に入れない社会になっていったのである。そうした時代状況のなかで、少数エリートだけのものであった漢文学習がとくに中下級の武士たちの中で急速に広がっていった。漢言語とネイティブのクレオール言語、本来まったく異質の言語が接しあい重なりあってごった返すなかでさまざまに新たな意味や表現形式が日本語に導入された。人称詞の領域においても、「拙者」のような漢語自称詞が大量に借り入れられ、身分制度にもとづく日本的な封建社会を支える言語が行き渡るようになった⁽²⁰⁾。武士と庶民との身分上の尊卑が緩やかになり、人々の自己意識が激しく揺れた時代でもあった。日本の歴史に自称詞がこれほど多様であった時代はない。歌舞伎ことばはそんな時代の世相を反映している。

やがて、身分制度が崩れはじめ、それまで一般に使われなかった漢語自称詞「僕」が近代的な平等関係における自己の表象として登場する⁽²¹⁾。Brown and Gilman（1960）の Power semantic vs. Solidarity semantic にそって言えば、「僕」はタテ型の権力関係ばかりを強調する封建的人称法の脱構築に向かう一人称詞であった。幕藩体制が終焉し、維新を経て近代化が進行する社会で、「僕」は文明開化時代を象徴する一人称詞となって各階層に浸透していった。中世のサムライことば、近世に行われた漢語自称詞の多くは、急速に古語化し、廃語化していった。「僕」は、最後の漢語自称詞だ。

8. 終りに一揺らぐ「私」

歌舞伎脚本の自称詞をデータにして、原日本語に溯り、そこに一人称と二人称の区別を明らかにしない前人称的言語を発見した。形態的に区別された自称詞と対称詞が創出されたのが中世、漢語自称詞が大量に借用されたのが近世前期であった。近世後期、平等志向の「僕」が普及し、現代日本語の一人称詞は「わたくし」「わたし」「ぼく」「おれ」を中心におおむね治まったかに見える。しかし、どれも過去の階級性、女性差別性を引きずっている一人称詞、どれが自分に相応しい一人称詞なのか、どの一人称詞が自分のアイデンティティにぴったりするのか、だれも確かなことはわからない。自称詞の揺らぎにこだわった詩人長田弘（2002）は詠う。

「私」の不確かさを前にして、立ちすくむ、うつむく、立ちむかう、鍛える、挑む、^{いらだ}苛立つ、^{あらが}抗う、開きなおる、背をむける、立ち去る、逃げさる、身をくらます、口を閉ざす、それぞれに処し方は違っても、あてどない「私」というものをそのままに表してきたのは日本語の一人称、というより、いつでも日本語の一人称の揺らぎ^{ゆらぎ}でした。一人称の揺らぎというのは、どのように名乗りでる「私」なのか、ということです。

注

- (1) アンダーソン（1997：238）。
- (2) Kuroda（1979：14）。
- (3) 長田（2002）。
- (4) たとえば、Ruhlen（1994：252）はその12章「世界言語の一人称、二人称代名詞」を「一人称、二人称単数代名詞は言語の中でもっとも意味が安定したカテゴリーである」という宣言で始めている。
- (5) Thomason and Everett（2001）。
- (6) 文字文明以前の原始的な環境では、同じ言語で通じ合う集団はメンバーの数もそれほど多くならないものだから、異なる言語で生活する集団がいくつも隣り合って存在するのが普通である。異種族間の接触に際してピジンが生まれ、クレオー

ル化し、より広域のコミュニケーションを可能にする言語に進化するものだということもピジン・クレオール研究で明らかにされている (Akiba 1978、Reynolds 1982、1984、小松1999)。

- (7) 「前人称」という用語は、市川 (1978) による胎児一乳児の発達心理に触れての哲学的論考で使われている用語である。英語でも日本語でも、この概念に相当する用語がない。一人称詞、二人称詞、三人称詞というような人称詞発達以前の人称詞という意味で、言語発達史の用語として採用した。四人称という用語もあるが、ここで言う「前人称」とはまったく違う。
- (8) Labov (1994 : 11)。
- (9) たとえば、高田・渋谷・家入 (2015)。
- (10) 春陽堂の『世話狂言傑作集』(大正14年 = 1925) と『日本戯曲全集』(昭和4年 = 1929) より。() 内の数字は初演年。「傾城入相櫻」(1698)、「太平記忠臣講釋」(1748)、「隅田川續佛」(1784)、「猿廻首途の一諷」(1798)「戀飛脚大和往來」(1700年台)、「花雨濡嫁入」(1809)、「東都名物錦絵始」(1811)、「油商人廓話」(1816)、「東海道四谷怪談」(1825)、「傘轆轤浮名濡衣」(1825)、「天人娘樽販」(1826)、「櫻時廓美談」(1829)、「積情雪乳貫」(1830)、「戀音便主水白糸」(1852)、「三世相錦繡文章」(1857)。
- (11) 遠い過去の言語状況を知ろうとする時、親縁関係や同系性が推定される諸言語を比較する方法 (= 比較言語学) と同一言語内の変化形を比較分析する方法 (= 内的再構築) がある。「原日本語 = ピジン・クレオール」説は、後代 (例: 江戸時代) の言語データから過去の言語を推定するもので後者の方法である。
- (12) 市川 (1978)。
- (13) 「-共」(身共)、「-ら」(我等)、「-め」(拙者め) が接続された形は、辻村 (1968) の用語では自分が下位であることを認める自称詞という意味で「下位主体語」とされている。
- (14) 久米田 (2007) にも「ワ」(私・俺・我) として載っている。ホノルル・コミュニティ・カレッジの日本語学科担当の米田シオコさんによれば、彼女の出身地である津軽に「ワ」、それに「ウワ」、「オラ」の自称詞変化形があるという。自称詞「ワ」は対称詞「ナ」と対の人称詞だとも。津軽地方に今ものこっている自称

詞「ワ」（例：「ワ、シラネー」「わたしはしらない」）が、対称詞にも使われているという証拠はない。「ワ」の他に「オラ」を自称詞とするレベルがあるが、「ワ」にたいして「アンタ」、「オラ」にたいしては「ナ」が対称詞として使われているようだ、というのが米沢さんの観察である。「ワ」が自他の区別をしない原日本語人称詞であったとしても、その後いくつかの階層ができるなかでそれぞれに対称詞を導入し、自他の区別を徐々に意識化し言語化したのであろう。

- (15) 小島裕将 (2014)。 <https://ja.wikipedia.org/wiki/河内弁> (2017年9月1日閲覧)
- (16) grammaticalization (文法化) は、普通名詞や動詞がその語彙的意味を失って、文法的な機能語になる変化をさすが、この場合すでに機能語になっていた「おれ」の機能が再定義されたことを指す。
- (17) Malinowski (1923) は、トロブリアンド諸島のアボジニーの言語を「未開社会の言語」として観察記録し、未開人の言語は、彼らの生活のなかでの行動に溶け込んでいるものであること、ことばが彼らの「今、ここ」での行動と分ち難い性質のものであることを強調している。
- (18) 加藤 (2006: 187)。
- (19) 「土農工商」の意味についていくつかの異なる議論があるが、ここでは、この問題に深入りしない。
- (20) Reynolds (2017)。
- (21) Reynolds (2005, 2014)。

引用文献

- アンダーソン、ベネディクト (1997) 白石隆・白石さや訳『増補想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版
- 家永三郎 (1982) 『日本文化史』(第二版) 岩波新書
- 市川浩 (1978) 「<身>の構造」田島節夫ほか編『人称的世界』pp. 105-175 弘文堂
- 長田弘 (2002) 「変わらぬこの国の不確かさ映し出す」(『朝日新聞』2002年6月6日夕刊)
- 加藤徹 (2006) 『漢文の素養』光文社新書
- 久米田いさお (2007) 『あがだんぶりー津軽の標準語』モツケの会

- 小松英雄 (1999) 『日本語はなぜ変化するか』 笠間書院
- 志田義秀・佐伯常磨編 (1974) 『日本類語大辞典』 講談社
- 高田博行・渋谷勝己・家入葉子編 (2015) 『歴史社会言語学入門』 大修館
- 辻村敏樹 (1968) 『敬語の史的研究』 東京堂
- 辻本雅史・沖田行司編 (2002) 『新体系日本史16 教育社会史』 山川出版社
- 野口武彦 (1994) 『三人称の発見まで』 筑摩書房
- 三浦理編 (1915) 『新撰書翰集』 有朋堂
- Akiba, Katsue (1978) A Historical Study of Old Japanese Syntax (Ph.D. dissertation, Linguistics, UCLA).
- Auer, Anita, Catharina Peersman, Simon Pickl, Gijbert Rutten and Rik Vosters (2015). Historical sociolinguistics: The field and its future. *Journal of Historical Sociolinguistics*, 1(1), 1–12.
- Brown, R. and Gillman, A. (1960). The Pronouns of Power and Solidarity. In Sebeok, T.A. (ed.) *Style in Language*. pp. 253–276. Cambridge: MIT Press.
- Kuroda, S.-Y. (1979) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. New York & London: Garland Publishing, Inc.
- Labov, William (1994) *Principles of Linguistic Change Volume I: Internal Factors*. Oxford: Blackwell.
- Malinowski, Bronislaw. (1923) The Problem of Meaning in Primitive languages. In C.K. Ogden and I.A. Richards (eds.) *The Meaning of Meaning*. pp. 296–336. New York: Harcourt, Brace & World, Inc.
- Reynolds, Akiba Katsue (1982) Reconstruction of *nu: A Hypothesis for the Origin of Japanese. *Papers in Japanese Linguistics*, 8(1), pp. 1–28.
- Reynolds, Akiba Katsue (1984) Internal Reconstruction in Pre-Japanese Syntax. In Jacek Fisiak (ed.), *Historical Syntax*. pp. 1–23. The Hague: Mouton.
- Reynolds, Akiba Katsue (2005) *Boku* in Edo Epistolary Texts—Emergence of Modern Self. In N. Ochner and W. Ridgeway (eds.) *Confluences: East to West in Honor of V.H. Viglielmo*. pp. 248–257. University of Hawaii Press.
- Reynolds, Akiba Katsue (2014) Calling for Anti-Shogun Movement—Inventing Modern Self in

Letter Writing. *Journal of Foreign Languages, Cultures and Civilizations*, 1(1.2), pp. 55–64.

Reynolds, Akiba Katsue (2017) *Boku* as an Expression of Modern Self—A Historical Study of First Person Pronouns in Japanese. Paper presented at the HiSon 2017, New York University/CUNY Graduate Center, April 6–7.

Ruhlen, Merritt (1994) *On the Origin of Languages*. Stanford, CA: Stanford University Press.

Thomason, Sarah G. and Danniell L. Everett (2001) Pronoun Borrowing. *Proceedings of the 27th Annual Meeting of the BLS*. pp. 301–315.

Weinreich, Uriel, William Labov, and Marvin I. Herzog (1968) Empirical Foundations for a Theory of Language Change. In W.P. Lehmann and Yakov Malkiel (eds.), *Directions for Historical Linguistics: A symposium*. pp. 95–195. Austin: University of Texas Press.

(Katsue Akiba Reynolds)

(2017.12.2 受理)